



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 598 回 冷えた料理

2014.10.12

孫が来た。久々に孫と一緒に、とっておきの料亭へ行くことにした。
心の行き届く、暖かいお料理を楽しみながら、お爺ちゃんのお皿はあっという間になくなっていく。外孫ゆえ、おじいちゃんにとっては滅多にない、至福の時である。

ふと、箸をおいて気が付いた。

二歳に満たない孫は当然の如く、「子供し放題」、嬉しいあまり騒ぐは…、暴れるは…で、お母さんの、先付、前菜はそのまま手つかずの状態である。

向付(むこうづけ)もまだ残っているし、このままでは、板長の精魂込めた煮物(強肴)、焼き物(鉢肴)、揚げ物(あぶらもの)と続く「味の極み」を堪能することができない。

せっかく暖かい食事を持っていっても、お母さんは子供に食べさせたりして、暖かかった皿はどんどん冷めていく。

それに比べてお父さん、お爺ちゃんの男どもは、子供が何をしようが、お母さんのご飯が冷めようが、お構いなしに自分の分を平らげていく。

周りを見ても、なるほど同じような光景である。

旦那が食べ終わると、子供の世話をする人もいれば、そのまま他愛もない噂話に興じる人もいる。どちらにせよ、暖かい食事を食べる嫁さんというのは、結構少ない。

多分、家でもこうなんだろうと、変に勘ぐってみた。

とりわけ子育て期におけるお母さんの力は大きい。

母性の凄さが自己犠牲とは感じさせない、献身的行動をとらせるのだろう。

世の男性は何とも敵(かな)わない、「慈悲」の心を持ち合わせている。

…芸術でも技術でも、いい仕事をするには、女性のことが分かってないとダメなんじゃないかな…

本田宗一郎(Honda 創業者)のこの言葉には、きっとそんなニュアンスがあるに違いないと、勝手に解釈した。

冷えた料理ばかりを食べているお母さん、そのお母さんの気持ちを少しでも理解し、分かち合いたい。たまにはお母さんに、暖かい、美味しいお料理を味わせてやりたい…お父さんが本気でそう思えば、もっともっと、心の通い合った家庭や社会ができていくのだろう。

安倍内閣が打ち出す「女性の社会進出政策」を促進する根底に、この思いは不可欠だろうと確信している。画竜点睛(がりょうてんせい)を欠くことなきよう、祈念する次第である。